
三色すみれ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三色すみれ

【ΖΖΓΔ】

Ζ3697D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

中学校の演劇部での出し物で主役をやることになった遼平と真琴。つれない態度の真琴に対して遼平が仕掛ける方法とは。ショーケースピアの真夏の夜の夢を題材にしました。

この中学校には演劇部がある。部活 자체はかなり真面目で熱心である。だがそれが高じてどうにもかなり難しい芝居をする傾向があるようである。

11の時の演田はショーケースピアであつた。彼の喜劇の中でも有名な作品の一つである『真夏の夜の夢』だ。中学生の演田にしてはやや難しいと思えるものであった。

だがそれでも彼等はそれに眞面目に取り組む。その眞面目さは顧問である杉岡先生をして唸らせて何も言わせない程見事なものであつた。

「いや、凄いね」

赤がかつた薄い髪でそこそこ端整な顔の杉岡先生は体育館の舞台の上でリハーサル等を行つてゐる彼等のその頑張りを見てこう言つただけであつた。

「何が俺のやることがないよ。何もしなくていいみたいだね」「何言ってるんですか、先生」

生徒達はそんな先生に対して声をかける。

先生のやうにとおはうる

「あれ、あるんだ

先生は生徒達からそう言われて顧問の先生としてはどうかと思える言葉を口に出した。

「それ、何かな」

「こつちも大変なんですから」

「ああ、そうだったね」

言われてそれに気付く。あまりにもすることがないので忘れていた

たがそれも立派な顧問の仕事である。しない顧問もいるがこの先生は違っていた。

「それがあつたね」

「そうですよ。よかつたら」

「指示出してくれませんか?」

「いやいや、俺だつてさ」

背広の裾をめくつて言つ。学校の先生の背広らしく随分くたびれている感じだ。だがその背広が結構似合つていたりもするから面白い。

「何かしないといけないし。だから」

「手伝つてくれるんですね」

「助かります」

「皆がいい芝居をして欲しいからね」

先生は笑顔で生徒達に述べる。そして道具の一つを手に取る。

「こうやって俺もできるひとを」

「御願いします」

「けれど先生」

ここで生徒の一人が先生に言つ。

「何かな」

「腰には注意して下さいね」

「きつくりなんてことは」

「怖いことを言つなあ」

先生にとつては洒落にならない言葉であった。先生の歳になるとそれが一番怖いのだ。気をつけていてもなつたりするものである。「それだけは気をつけるから。大丈夫だよ」それでも気をつけなければならないのでこう述べる。

「そうですか。それじゃあ

「御願いしますね」

「うん」

こうして先生は生徒達と一緒に道具の出し入れや整理にあたつた。

そういうしている間にも芝居の準備は進む。練習もかなり順調であった。

「あの古い用め、何をしているのだ」

シーシアス役の三年の生徒が実際に舞台でリハーサルをしている。制服のまま台本を手に芝居をしている。

「折角の身代を若者の自由にさせないというのか」

「四日は瞬く間に夜の闇に消え」

その横にはヒポリタ役の三年の女の子がいる。やはり制服姿で台本を片手にリハーサルを行っている。

芝居もかなり上手くいっている。だがその中で見えないトラブルも起こっていた。

「何かこんなのは嫌だよ」

ディミトリアス役の一年生若田部遼平が文句を言っていた。

「何でディミトリアスがハーミアを好きなんだよ」

やたらと背の高い少年である。顔は細面でわりかし整っている。脱色しているわけでもないが髪が茶色でそれもよく似合っている感じである。その彼が台本を見て文句を言っているのである。

「やつぱりさ。最初からヘレナが好きな方がいいじゃない」

「何馬鹿を言つている」

その横の黒髪をポニー・テールにした小柄な女の子が彼に突つ込みを入れる。目が切れ長でそれが奇麗な印象を与える。実際に小柄ながら大人びた印象の女の子である。

第一章

彼女の名を桜森真琴という。遼平のクラスメイトでもある。クラスではしっかり者として知られている。それに対しても遼平はお調子者である。

「それでは芝居にならないだろ？」「

「そりかなか」

だが遼平はそれでもお構いなしといった感じであった。

「だつてさ。ヘレナは桜森さんじやない」

「それがどうした」

ジロリと遼平を見上げて言つ。かなりきつい視線である。

「だつたら最初からそれでいいや、僕はね」

「何が言いたい？」

あらためて遼平に問う。

「そもそも若田部、御前はだな」「

「僕は？」

「重んじてだ」

「別にそんなのどうでもいいや

しかし遼平はそういうことは一切お構いなしであった。平気な顔である。

「僕はヘレナが好きなんだし」

「ヘレナがか

「というか桜森さんが」

その軽い調子で言つのだつた。

「好きなんだけれど」

「愚かな話だ」

その言葉をすぐにぱつぱつと切つて捨てる真琴であった。

「そんなことを言つても何も起こりはしないぞ」

「あらら、冷たいなあ

「冷たいも何もだ」

本当にその冷たい態度で言葉を続ける。

「では聞くが私がハーミアだったらいざつしたのだ

「その時はハーミアにさ。夢中に」

「最後までか

「うん、最後まで

あつけらかんとした調子で述べた。相も変わらずといつた調子で。

「それは駄目なのかな」

「駄目に決まっている。結局何も考えていないのだな」

今度は少し軽蔑する田で遼平を見上げた。視線の鋭さときつさが

さらに増している。

「よくそれでショーケスピアをやるのとするものだ

「シーケスピアはやる気つて先生が言つてるじゃない」

杉岡先生である。つまりは先生の受け売りの言葉である。

「だから僕もいいんだよ」

「それでいいのか」

「うん、全然」

態度はずつと変わらない。

「それに」

「それに？」

「桜森さんだつて僕とずっと一緒にいたいんだよね。だから演劇部

に

「それはない」

一言であった。

「それだけは絶対にない。安心しろ」

「またまたそんな

信じよつともしない遼平であった。

「照れ隠しにそんなこと言つて」

「御前は人の言つたことが理解できないのか?」

遼平に對して怒った顔を見せた。

「前から思つていたが」

「ううん、わかつてるよ」

しかし遼平はへらへらとした様子で真琴に言葉を返す。少なくとも全然反省なぞしてはいないのはその態度でわかった、「わかつてるけれどさ。桜森さんはわかつていなんじゃない」

「私がか」

「そうだよ。ほら、わかつていなー」

「一体何のことだ」

真琴は本当に何が言いたいのだ御前は、と顔に書いていた。彼女は嘘がつけない真つ正直な性格である。だから感情もまた顔に出るのである。

「そう言われてもわからないのだが」

「僕はわかつてるからいいよ」

遼平はそのへらへらした顔で軽く述べる。

「真琴さんが僕を好きだつてことがね」

「いい加減にしないと殴るぞ」

半分本気の言葉であった。

「そんなことばかり言つていると」

「ほら、顔が赤い」

むつとした真琴に對して言つ。軽い突つ込みであった。

「やつぱりそうなんだ。桜森さんは僕のことが」

「あんな、御前はいつもそう言つが」

本氣で頭にきてきたので声を荒いものにさせてきた。

「私は御前のそつしたいい加減などころにいつも」

「あつ、二人共」

ここでライサンダー役の一年の同級生が一人に声をかけてきた。

「何かな」

「何だ?」

二人は同時に彼に顔を向けた。

「そろそろだから。演技に入つて

「了解」

「わ、わかつた」

やはり遼平は軽い返事であり真琴は堅苦しい挨拶になつてゐた。ここにも二人の個性の違いがはつきりと出ていたのであつた。

「それじゃあ。やろうか

「演技中はふざけるなよ

「わかつてゐるつて。ハーミア、考えなおしてくれ」

遼平はすぐにディミトリアスになつた。見事な変身であつた。

「僕の正当な権利を認めてくれ

「まあ美しいですつて？」

そして真琴も。ライサンダーとハーミアのリハーサルの後で自分の役に入る。

「ディミトリアスの心を捉えるのはどうすればいいの？」

彼女も見事な演技であつた。リハーサルだというのにもう本番のようであつた。一人は芝居の間は見事にそれぞれの役に入つていて、そしてそれは部活が終わつてからもであつた。

「いやあ、お見事お見事」

杉岡先生は大道具を手伝つた後で生徒達を前にして彼等を褒めていた。

「俺からは何も言つことがないよ、本当に」

「そなんですか」

「ああ。この調子でやってくれたらいい」

笑顔で太鼓判を押す。かなり能天気な感じであつたが。

「是非な。じゃあ今日はここまでだ

「はい」

こうして解散となつた。真琴は一人で帰ろうとしたがそこに遼平がやつて來たのであつた。

「待つてよ」

「待つつもりはない」

真琴は横に来た彼に冷たく言い放つた。もう辺りは夕暮れも終わりかけて夜の闇が近付いてきていた。家々は黒に近くなつていて空は赤が濃くなり次第に黒くなつていた。何もかもが赤から黒になろうとしている時間であった。

二人はその中を並んで歩いていた。といつても遼平が無理矢理ついて来ているのであるが。二人の前にあるそれぞれの影はかなり長くなつていてそれが消えようとしている夕暮れと街の電灯に照らされていた。

「さつさと帰れ」

「あれ、デートは嫌なんだ」

「断る」

やはりまた一言であつた。

「私は男とデートする趣味はない」

「冷たいなあ、っていうか素直じゃないなあ」

「あんな」

今の素直じゃないという言葉に反応して自分の左にいる遼平をむつとした顔で見るのであつた。

「どうして御前はそう思うのだ？」

「素直じゃないのは本当じゃない」

しかしそれでも遼平は言う。

「本当はデートてきて嬉しい癖に」

「勝手に人の気持ちを捏造するな」

そう遼平に対してもう一つ。それと同時に彼の少し着崩した青い詰襟を見る。対する真琴の服はスカートの丈まで端整に着られた黒とエンジ色のセーラーであった。この学校の制服である。

「全く。服装もいい加減なら言葉もいい加減だな」

「そうかな」

遼平はその言葉にとぼける。

「僕は普通だよ」

「そのだらしない格好でか」

「うん」「うん

あっけらかんと答える。

「少しふざけてるだけで」

「そのふざけているのが駄目なんだ。そもそも部活の時もだな

「真面目にやつてたよ

しかし彼はこう言い返す。

「やる時はね。そうじやないの?..」

「それはそうだな」

悔しいがそれは認めるしかなかつた。彼女にとつては残念なことに。そうして電灯に少しだけ照らされている彼の顔を見上げるのだった。

「一つ褒めてやる」「何を?」
「あの『トイリニアスの演技だ』
その今やつてこいる芝居の彼の役をである。
「見事だ。何も落ち度もない」「
桜森さんにそう言わると嬉しいね」「
だがそれだけだ」「
そのうえでこいつも書つのであった。
「他は全然駄目だ」「
あれつ、そうかなあ」「
何を褒めるといつんだ」「
あまりにもきつい言葉であった。
「御前に対して」「
「それじゃあや」「
それはそれで。遼平はめげない。めげないでこいつ書つてきた。
「その練習する?」「
「練習か」「
「うん。もつと上手くなる為にさ」「
そう言いながら自分の鞄から脚本を出してきた。言つまでもなく
真夏の夜の夢の脚本であった。
「下校中でも。どうかな」「
「いい心掛けだな」「
彼女もそれを受けたことにした。それで自分も鞄から脚本を出し
たのであった。
「では。はじめるか」「
「うん。それじゃあ」「
彼はすぐに芝居に入った。やつなると真剣であった。

「僕が優しい言葉をかけたことがあるかい？」

「そう言われば言われる程貴方が好きになるの」

「君を猛獸の餌食にさせてやる」

「どんな猛獸だつて貴方程冷たくはないわ」

身振り手振りを交えながら下校中も芝居をする。その時二人は完全に演劇の中の恋人同士になっていた。当然真琴も。その時彼女はヘレナの目で遼平を見ていた。しかし自分ではそれに気付かないのであった。

公開前日の実際の衣装を着てのリハーサル。この時も二人はディミトリアスとヘレナになっていた。体育館の隅で衣装を着て事前の二人だけの打ち合わせと練習をしていた。

「ここはどうだな

「うん」

ディミトリアスの服を着た遼平はヘレナの服の真琴の言葉に頷いていた。互いに立つて向かい合いながら言葉を続けていた。

「そしてだ。ここは」

「こうだね」

ここで遼平は少し身振りを入れた。

「それでいいんだよね」

「その通りだ」

その遼平に対しても告げる。

「いいではないか」

「やっぱり相手がしつかりしているからね」

「お世辞はよせ」

やはりクールなまでの言葉であった。

「御前の方がずっと上手だ。私は御前のレベルに達しようと必死なのだ」

「またまたそんな」

「それは事実だ。私もまだまだ努力が必要だ」

「じゃあ、今日も頑張ろつよ」

「わかつた」

遼平の言葉に頷いてそのまま演技に入る。その謙遜の言葉とは裏腹にその演技は遼平に勝るとも劣らないものであった。杉岡先生もそれを見て思わず感嘆の声をあげた。

「いや、凄いね二人共」

「そうですよね」

その先生の側にいた大道具係の一人がそれに同意して頷く。彼もまた端役で参加している。部員の人数の関係で大道具係とはいっても芝居に参加するのである。

「演技に熱が入っていますし」

「それに抜群に上手いね」

先生は感心した顔で笑顔で頷いていた。

「どうやらあの一人が芝居の軸になるね」

「そんなですか」

「そうだ、間違いなくね」

その結構広い額に笑みの皺を浮かべさせての言葉であった。

「これからが楽しみになつてきたよ」

「ですね」

「うん」

先生はそんな調子であった。確かに一人の演技には期待して熟知していたがそれでも一人の内幕は知らなかつた。知らなかつたというよりも気付かなかつた。もつともそれに気付いていないのは先生だけでなく部活の全員であったのだが。皆芝居の準備や演技に熱中していく彼等のことには全く気付いてはいないのであった。迂闊と言えば迂闊であった。

リハーサルは大成功に終わった。リハーサルといえどその出来は素晴らしいものであり満足のいくものであった。その一人もそれ自体には満足していた。というよりは真琴も、である。

真琴はリハーサルが自分なりにでも満足がいったことに気分を充実させていた。そしてその気持ちのまま家に帰った。だが家に帰つても練習を続けるのであった。

「御願いだから時間を縮めて」

制服を脱いで私服に着替える。部屋は質素で何もない自分の部屋だがそれでも舞台をイメージして練習をするのであった。

「眠りよ。悲しみの眼を閉ざしてくれる優しい眠りよ」

もう台本を手にしてはいない。台詞は全部覚えている。そのままでの言葉だった。そうして一人で芝居を続ける。だがその目の前には相手がいた。

「あいつもやつている」

これは心の中での言葉であった。

「だから私も」

彼女は無意識のうちに遼平を意識していた。しかしそれには気付いていない。そうしてそのまま本番へと入るのであった。

本番の最初の日。舞台の前は生徒や先生達でごったがえしていた。演劇部の芝居は学校の中ではかなりの評判であるのだ。だから人気も高かつた。

「先生、今回の自信の程は」

「如何でしょうか」

新聞部の面々が杉岡先生にインタビューをする。これはいつものことでありいささか儀礼的なものがある。しかし先生は笑顔でそれに応えるのであった。

「それは生徒達に聞いて欲しいね」

自信に満ちた笑顔であった。新聞部の面々もそれを受け取る。

「是非共ね」

「是非共、ですか」

「そうぞ」

また笑顔で述べる。

「彼等が演じるんだからね。俺ではないんだよ」

「では先生から見てですね」

「彼等はそれを受けて話題の振り方を変えてきたのであつた。

「今回の出来は。どうですか」

「それは見てのお楽しみだね」

「その自信に満ちた笑みでの言葉であった。

「是非共ね。見て欲しいな」

「わかりました」

後でこのインタビューは自信に満ちた予言となるのであつた。それだけの出来だったということである。その芝居がいよいよはじまるのであつた。

皆はじめから見事な演技であった。とりわけ遼平と真琴が。彼等は完全にティミトリアスとヘレナになりきつて芝居をしていたのであつた。

「ティミトリアス待つて」

「行けつて言つてるじゃないか」

完全に彼を慕う少女とそれを拒む若者であった。ギリシアの服を着た二人は真剣な顔で演技をしてくる。その熱は観客達にも伝わつていた。

「凄いわね」

「ああ」

誰もがその演技を見て話す。

「前から上手い二人だつたけれど」

「今日は特に」

「僕の真心がわかつていな癡に

ここでティミトリアスの言葉が出た。

「僕の愛に比べれば彼のそれなんて問題にはならない」

「ひどいわ、ひどいわこの嘘吐き」

そしてヘレナの言葉が。完全に一人が主役であった。

「何か主役になつてない?」

「そくなつてるよね」

また観客達がひそひそと話をする。

「凄い演技だよ」

「何か別格」

誰もがそう見ていた。そしてその中で芝居は佳境に入つていく。それと共に一人の芝居はさらに熱を帯び最早完全に周りをその中に引き込んでしまっていた。

「あれ程ハーミニアを思い詰めていた心が急に淡雪のように消えてしまい」

その場面ではヘレナを演じている真琴をじつと見ていた。

「何時までも見飽きぬのはヘレナだけでござります」

真琴もそれはまた同じであった。じつと遼平を見詰めている。そうして言つのだった。

「ディミトリアスという宝を拾つたけれど」

その琥珀の目を彼から離しはしない。ヘレナとして語る。

「私のものと言われてもまだ信じられません」

「僕達は本当に田が覚めているのだろうか」

遼平はその言葉を受けて言つ。

「何かまだ寝ていて夢を見ているようだ」

じつと見詰め合い話をしている。そんな二人を見て彼等のクラスメイト達は言つのだった。

「あの一人まさか」

「かなり怪しいわね」

そう観客席でヒソヒソと話をするのであった。

「顔が完全に真剣じやない」

「あれつてお芝居でしょ？」

「どうだか」

女の子の一人がそれに異議を呈する。

「それも怪しいわよ」

「けれども、あれつて」

「ねえ」

ここで皆遼平を見るのであった。

「若田部の奴が一人騒いでるだけだ」

「そんなんじゃないの？」

「甘いわね」

しかしその言葉にはこうした答えが返つて来た。

「それもバニラアイスより甘いわよ」

「そうかしら」

「しかもトッピングやり放題した時よりも甘いわ」

また随分胸焼けしそうな例えである。少なくともショーケース・スピアの時代にはない例えだ。もつとも何かと大袈裟な表現の好きなシェークスピアであるからアイスクリームを知つていれば使つていたかも知れないが。

「いい、そもそもね
「ええ」

皆その女の子の話を聞く。彼女は大真面目な顔で皆に對して講義をするのであった。

「本当に嫌なら真琴だつて完全に避けるでしょ。違つ

「そういえばそうね」

「あいつ何だかんだ言つていつも避けていないわよね

「そこよ」

彼女はそこを指摘した。

「そこなのよ。そういうのを見ているとな

「元々まんざらじやなかつた。そうね」

「そういつこと。さて、こつからよ」

彼女はその顔を舞台に戻して言つ。もつすぐ終わりであった。

「あの一人がどうなるかね

「かける?」

「勿論

クラスメイト達は自然とそんな話になつてゐた。皆随分乗り氣である。かなり樂しんでゐるのがその様子からもわかる。氣楽と言えば氣楽である。

「若田部がやると思うぜ」

男のうちの一人の予想であった。

「こにはさ」

「オーソドックな予想ね

女の一人がその予想に笑つ。

「そう上手くいくかしら」

「あの桜森だぜ」

真琴の頑なさとこゝかあの堅苦しさはクラスの皆が知つてゐる

とであつた。それもあつて皆樂しそうに今後を見ているのである。

「自分からは仕掛けないさ」

「どうかしら。それはわからないわよ」

見れば女は殆どが真琴が動くと言つのであつた。

「その辺りは」

「若田部に決まってるじやねえか」

しかし男は遼平を推す。

「あいつの性格だつたらな」

「それは最後までわからないわよ」

「そうよ、カーテンコールまでね」

女組はそう言つて余裕を見せるのであつた。何はともあれ舞台は今終わつた。オベローンやティターニア、パックの役者達が最後の口上をして見事舞台は幕を降ろした。皆の拍手の中で役者達が出来る。まずは笑顔で皆揃つてである。

見れば遼平と真琴はその中で一人並んでいた。その手をつなぎ合つてゐる。

「あの手見て」

「ああ」

クラスメイト達は一人の手に注目した。

「どつちが握つてるかしら」

「若田部だな」

一人がそれを見て言つ。

「ほら、見る」

「そうね」

「確かに」

皆もそれを見る。見れば確かに遼平が若菜の手を握つているのだった。

「これで決まりだよな」

「なあ」

男達は彼が自分から手を握つてゐるを見て誇らしげに女達を見

る。

「若田部だぜ？やつぱりなあ」

「賭けに勝つたらラーメンかハンバーガーな」

「くつ」

「まざいかも、これつて」

「だから最後まで見なさいつて」

しかし女組のリーダー格はあえてこいつのついつのであった。随分強気

に。

「カーテンホールまでわからないつて言つてゐるでしょ」

「もう勝負ついてるのにかよ」

「諦め悪くないか、それつて」

「残念だけれど違うわ」

彼女は腕を組んで平然といつ男組に返した。

「だつてまだ最後じゃないでしょ」

「まだ言つのかよ」

「強気だねえ、全く」

「女は強気でいかなくちゃ」

ある意味真琴よりも気が強いと言えた。それがあまりにもはつきりとわかるので男組から見ても引くものがあった。だが女組はそんな彼女に元気付けられた。

「そうよね、まだ」

「カーテンホールがあつたわよね」

それに勇気付けられる。そうして言つのだつた。

「最後まで見ましょう」

「そうね」

「どうなんだか」

「まあいいんじゃね？」

男組も強気だつた。だからこそ今はそんな彼女達の言葉を笑顔で受けるのであつた。

「ここのはさ。大きく」

「構えていればいいか」

「そうよ。勝ち負けは抜きにしてね」

「また女組のリーダー格が述べる。」

「どんと見ていればいいのよ。ただし」

「ただし？」

「何、だよ」

男組は自分達に顔を向けてきた彼女に対して問う。見ればその顔は今までの強気な様子に加えて何かを物欲しげな笑みがあつた。

「負けた時は、わかっているわね」

「ハンバーカーかラーメンかよ」

「私はビッグマックだから」

そのうえで事前に注文する。

「いいわね」

「おい、一番高いのかよ」

「そりやねえぞ、おい」

「勝つんでしょう？ だつたらいいじゃない」

しかし彼女はその笑みで男達に言い返すだけであつた。

「あんた達が勝つんだつたらね」

「・・・・・ そうか」

「じゃあまあいいか」

「そういうことよ」

「話はそれでまとまつた。」

「わかつたらね。最後まで見ましょう」

「ああ、わかつた」

「それじゃあな」

彼等は舞台に目を戻した。揃つての最後の挨拶が終わり後は役者それぞれのカーテンコールであった。主役のオペローン達のものが終わりライサンダーとハーミアのも終わつた。彼等のそれは普通に終わつた。それからいよいよであつた。

「いよいよね」

「ああ」

クラスの皆は固唾を飲む。遂にその一人が姿を現わした。

「出たわ」

「さあ、何が起ころるか」

皆何が起ころるか見守る。一人は舞台のカーテンの前だ。だがそこでは手をつないではいなかつた。

一人並んで皆の前に出て来る。そうしてまずは一礼するのだつた。

「上手くいつたね」

「そうだな」

一人は皆の拍手を受けながら言い合つ。そこで遼平はそつと自分の手を真琴の手に近付けた。だがそれは真琴によつて止められてしまつた。

「今度は駄目だ」

「えっ！？」

「駄目だと言つてゐる」

いつもの厳しい顔で彼に告げるのであった。

「同上」

「いいから駄目だ」

また彼に言つ。

「わかつたが

「何で？」

卷之三

「お、おは御前たら来たな」

彼を見てした。その厳しさ

「御前からな。覚えているな」

「だつて。あの時は」

「いいから聞け」

声が一段と厳し

「私の話をいいか」

「あつ、うん。

卷之三

その處しさは負ける形で詰く

私はな
せじれた
せじ

一 やり返すって？

「そうだ、やはり返すのだ

またそれを告げる。

「それも何倍にしてもな」

「おのれ」

何かえらハ剣幕なので遼平は内心感つていた。それでまた言う

の
だ
つ
た。

「僕手を握つただけだけれど」

「それだ」

真琴はそこを指摘してきた。

「あの時私は何も言わなかつたな」

「オッケーだつたんだよね」

「ま、まあそうだ」

何故かここで顔を赤くさせる真琴であった。遼平はその顔が妙に可愛らしく思えたのだがそれについて軽口を言つ前に真琴が言つてきたのだった。

「ただしだ。ただではない」

「あつ、そつだつたんだ」

「それなりの見返りはしてもううからな
顔を赤くさせたまま彼に言つてきた。

「その覚悟はできているのだろうな」

「覚悟つて。何が?」

「とぼけるな」

その赤い顔で彼に言つ。

「手を握つたんだ。その見返りは

「ソフトクリームとか?」

真琴の好物なのは知つてゐる。こう見えても女の子らしく甘いものが好きな真琴であった。実はソフトクリームは遼平も好物だったりする。

「それなら」

「違う、馬鹿

今度は馬鹿ときた。

「わからないのか?手を握られたら」

「ソフトじゃないとしたら」

少しわからなくなつた。そもそもこのソフトというもののすら特に根拠のないものである。しかしそれでも彼は根拠なくそれだと思っていたのである。

「何かな」

「いいか？」

わからない彼に対してもうのだった。

「それはだな。その」

「うん。何？」

「これだ」

いきなり攻撃を仕掛けってきた真琴であった。その攻撃とは。彼に抱きついてきたのだ。その小さな身体を思いきり伸ばして彼の首の自分の両手を巻きつけてきたのであった。足がもう完全に爪先立ちになっていた。

「えっ！？」

「これだ。そのお返しは

そう彼の耳元で囁く。遼平は田が点になつたが驚いたのは観客達であった。

「なっ！？」

「あの桜森がかよ」

思わずこう叫んだ一年もいた。一年の間では真琴といえばもうこんなことは絶対に有り得ないキャラクターで通っていたからこれも無理のないことであった。

「何てこつた

「マジかよ」

「わかつたな」

真琴は遼平の耳元でまた囁いた。遼平は少し我に返つてそれを聞いていた。

「私だつてな。ヘレナだつたんだぞ」

「うん」

それはわかっている。それで遼平はティミア・リースだ。

「わかってるけれど、それは

「だつたらだ。わかるな」

また彼に言つ。

「私も。あの三色のすみれの魔法で」

「あれっ！？」

ここで遼平はあることにふと気が付いた。

「三色すみれだよね」

「そうだ」

劇の中で出て来る魔法の花だ。妖精達が恋の魔法に使う花でありこれを眠っている恋人達の目にかけて恋の病に陥らせるのである。これでディミトリアスはヘレナの虜になるのである。

「それがどうしたんだ？」

「あれって確か」

少しずつ我に返つて記憶を辿りながら言つ。

「ディミトリアスとライサンダーにかけるもので」

「うつ」

真琴は彼の言葉に声を詰まらせた。実はこの魔法は最初妖精パックの手違いでディミトリアスもライサンダーもヘレナを愛するようになるのだ。ライサンダーは本来の恋人ハーミアを忘れてしまう。後でそれを怒った妖精王オベローンが眠つた彼等達にまた魔法をかけさせて本来の形にするのである。当然ながら遼平も真琴もそれを知つている。知らない筈のないことである筈だった。

「ヘレナは
「それはあれだ」
抱きついたまま顔を背ける真琴であった。
「間違いで私にもかかつただけだ」
「そうだったの」
「そうだ。そうしておけ」
そう彼に告げる。
「わかつたな」
「うん、わかつたよ。それじゃあそれで」
「納得しろ」
強引だがこれで話はまとまった。しかし観客席は騒然であった。
「幾ら何でもこれは」
「問題では?」
先生達が舞台の上で抱きついて一人を見て言いはじめたのであった。
「堂々とこんなことは」
「やはりこれは」
「いや、見事な演出だね」
ところがここで杉岡先生が言つたのであった。顔に焦りが見られる
がそれでも必死に一人のフォローに回るのであった。
「カーテンコールでもこんななのを見せてくれるなんて。シェークスピアをよくわかつているな
「あれつ、これつて」
「演出だつたんですか」
「その通りですよ」
「そう他の先生にも言つ。」
「いや、舞台はカーテンコールの間も続きます」
その通りである。舞台は幕が降りて終わりかというとそうではな

いのだ。カーテンホールもまた舞台なのだ。オペラにおいてはとりわけそうである。先生はそれで誤魔化しにかかったのであった。

「ですからこうした演出をしたのです」

「そういえばティミトリアスとハーミニアですね」

「そう、恋人同士です」

これまた強引なこじつけであった。先生はとにかく必死にこの場を取り繕いにかかっていた。

「ですから。こういうこともまた」

「あるのだと」

「恋人同士に相応しい演出でしょ?」

そのまま押し切りにかかつた。

「ですから問題はないのです」

「演出ですか」

「その通り」

また強引に主張する。

「ですから。御安心を」

「ふむ。顧問の方が仰るのなら

「そうなのでしょうな」

先生達もまずはこれで納得するのであった。内心いぶかしむものが多分にあつたとしても。

「それではそういうことだ」

「ここはいいですな」

「そう御理解して頂けると何よりです」

失言だがここでは誰もそれに気付かないのが幸運であった。

「芸術ですか」

「芸術ですか」

「そうです」

それで何でも許される。ある意味非常に有り難いものである。

「ですから。あの二人の演出なので」

「わかりました」

先生達はやつと完全に納得したようであった。

「それではこの件は何もなしといふことで」

「ええ。そういうことで」

先生達は何とか杉岡先生が抑えきつた。しかしひ岡先生にとつてはまことに心臓に悪い、ヒヤヒヤとする事態であった。

（全く）

先生は舞台の一人を見ながら心の中で呟く。見ればまだ抱き合つたままだ。といつよりは真琴が遼平に抱きついたままなのであつた。（骨が折れるな、こんな所まで）

だが悪い気はしていない先生であつた。別に一人を叱る気もなかつた。何故なら全ては真夏の夜の夢のことであるからだ。ショーケスピアの魔法のせいだからだ。

「さて、と」

一人のクラスの女の子達は得意満面であった。

「これでいいわよね」

「ハンバーガーね」

「それかラーメン」

「ちえつ」

男達は彼女達のにこやかな顔を見て思わず悪態をついた。

「何でこんなことになるんだよ」

「幾ら何でも有り得ないんだろ」

「悪いけれどこれが現実なのよ」

例の中心人物もまた誇らしげであった。その顔で男組に告げる。

「もうちょっと女を勉強しなさいって」

「勉強してわかるものかよ、これって」

「センスも必要ね」

彼女はいささか難しいことを述べてみせるのだった。

「センスがないと女ってのはわからないわよ」

「何だ、それって」

「滅茶苦茶じやねえか」

男達はそれを聞いてまた悪態をつく。

「それで負けるなんてよ」

「何か腑に落ちないな」

「けれど負けは負けよ」

「そうよ。観念しなさい」

女組はそんな彼等に対し上機嫌で言い返す。実に気楽なのは彼女達がおじつてもううつ立場だからである。実に簡単な話であつた。

「わかつたらね」「
「どつちがいいの？」
「どつちでもいいさ」
男組はそう彼女達に述べた。
「どうせよ、おごるんだつたら」「
「何でもいいさ」
「センスあるじやない」「
その中心人物は彼等の潔さを見てそう言つてた。
「これがセンスなのかよ」
「そうよ。センスつてのは潔さも重要なのよ」
こう主張してみせる。
「わかつたかしら」「
「何か適當な」と言つてねえか？」
「なあ」「
少なくとも男組にはそう聞こえる。そしてそれは正解だった。
「結局あれだろ？女の子にいいマードにできるかどつか」「
「それだけだよな」「
「何だ、わかつてるじやない」
しかも女組も堂々とそれを認めるのであつた。開き直りに近い。
「わかつてたら勉強する」「
「そしてその前にね」「
「わかつてゐる」
「じゃあ好きなの選べよ」「
そう女組に言葉を言い返す。
「どんなのでもいいからよ」「
「ただしラーメンかハンバーガーだけな」「
「それじゃあチャーシュー麺ね」

「私はダブルマック」

女組もそれを受けて好き勝手に言い出す。実に心地よい笑顔で。

「私はわかつてゐるわよね」

「ああ、当然な」

「ビックマックだろ」

男達はその冒子に對して言つてゐた。

「全くよお」

「一番高くてくくな」

「あら、授業料と思えば女こものよ」

昭子はしひつとして述べる。

「これ位ね」

「そうよねえ」

「安くついて感謝しなさい」

女組はまたしても「冗談」とばかりに言つて。やはりかなり勝手な調子である。

「ああ、わかつたら」

「放課後ね」

「やれやれだぜ」

「シヨークスピアの言つ通りだな」

誰かが言つたがシヨークスピアは何かと女性とつものに対して勝手なことを書いてゐる。それを知つてゐるからこそその皮肉まいた言葉であった。

だがその間も遼平と真琴は抱き合つてゐる。といつよつは真琴がずっと遼平を抱き締めたままなのであつた。

遼平はそんな真琴に對して言つた。

「あのや」

「何だ?」

真琴はその彼に応えてきた。

「何か用か」

「何時までこいつじてゐるの?」

彼はそう真琴に問うた。

「何時までとは。何がだ？」

「だからさ」

遼平は彼女の言葉を受けてまた言つ。

「こうして抱き合つているの。何時までなの？」

「暫くの間だ」

真琴はそう述べた。

「わかつたな、暫くの間だけだ」

「けれどさ。その暫くって」

遼平はまた彼女に言い返す。

「何時までなのかな」

「それを聞きたいのか」

「だつて」

遼平の声がかなり弱つたものになつていた。

「カーテンコールにしてもずっと長じしゃ。それに「それに?」
「拍手はもうとっくに終わってるよ」
「じつ彼女に言つ。」
「もうずっと前に。それでもなの?」
「気にするな」
だが真琴はそれでも強引に彼の言葉を突っぱね続ける。
「些細なことだ」
「些細なことつて」
「だから聞け」
少し戸惑う遼平に対しかなり強制的に言葉を叩き付ける。
「私がこつして自分から抱きついているのだぞ」
「うん」
自分でも自覚はあつた。見ればその顔が赤くなつてゐる。
「だからだ。感謝してだな」
「感謝つて」
「女が自分からこんなことをしていゐんだ」
顔を赤くさせたまままた告げる。
「だからだ。多くは言えないが」
「多くはつて」
「とにかくだ。もつ暫くこのままでさせひ。いいな」
「わかつたよ」
遼平も笑顔になつた。そうしてやつとそれを受け入れるのだった。
しかしそれだけではない。じつで彼は反撃に出た。
「けれどさ」
「何だ?」
「ここで終わりなの?」

そう彼女に問う。

「ここでとは？」

「だからさ。このカーテンコールだけで終わりじゃないよね」

また彼女に問うてきた。

「それはないよね」

「あの三色すみれは」

真琴は彼の言葉を聞いてまた舞台の「J」とを持り出してきた。
「ずっと効果が続くのだったな」

「うん」

彼は真琴のその言葉に頷いてみせた。笑顔で。

「そうだけれど」

「じゃあ。そういうことだ」

それが彼女の答えであった。

「そういうことって。それじゃあ」

「あの魔法が効くのは御前だけではない」

あまり、いや到底素直ではない言葉を告げる。

「私もだ。わかったな」

「わかったよ。それじゃあ」

ここで遼平はまた調子に乗るのだった。

「Jの後テートしない？」

「テートだと」

「うん、何時までもJでJでJしているわけにはいかないし
いい加減もうかなり抱きついたままだ。それは真琴もわかつてい
た。もつともわかつていてやっているのであるからそれがかなり悪
質と言えば悪質なのだが。

「だからさ。続きはテートで」

「テートだと」

真琴の目がむつとした。同時に剣呑な光を発する。

「御前はそれが望みか」

「うん。駄目かな」

遼平はまた真琴に問う。

「駄目だつたらいいけれど」

「駄目とは言わない」

やはり強い、硬質の口調で述べてきた。

「悪くはない」

「それじゃあ」

「ただしだ。いいか」

そのうえでまた言つてきた。真琴はやつと彼から離れて、それから言つのだつた。

「私にも都合やしたいことがあるのを忘れるな」

「したいことつて？」

「ヘレナと同じだ」

芝居に話を戻す。またしても。

「純真に、そのだ」

顔がまたしても赤くなる。そつして横田で遼平を見上げながら述べる。

「こいつしたことを楽しみたいのだからな。いいな」

「わかつたよ。それじゃあ」

遼平はこりと笑つて。そうして真琴に告げた。

「舞台でのディミトリアスとヘレナの続きはトーントで」

「そうだ」

真琴は彼のその言葉に頷く。

「それでいい。わかつたな」

「わかつたよ。じゃあヘレナ」

カーテンコールだが杉岡先生の言葉通りかまだディミトリアスであつた。

「これからも宜しくね」

「ええ、ディミトリアス」

真琴もそれを受けてヘレナになり。そうして応える。

「一人でずつとね」

じつして三色すみれの魔法を言い訳にしてかしないか一人の仲が
はじまつたのであつた。シェークスピアの魔法が今でも結ばれそ
うにもないカップルを見事結ばせた、楽しく不思議な魔法と妖精の劇
の。 そうした些細な話であつた。

三色すみれ 完

2007・10・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3697d/>

三色すみれ

2010年10月8日15時06分発行